

# 臨床心理学の位置づけとそのダイナミクス

恒吉 徹三

Position of Clinical Psychology and It's Dynamics

TSUNEYOSHI Tetsuzo  
(Received August 6, 2009)

キーワード：臨床心理学、ダイナミクス、アプローチ

## はじめに

さまざまな学問を学ぶさいに、その学問の位置づけや歴史を理解することは、その学問の現在を理解するためにも意味あることだと考えられる。現在、臨床心理学ないし臨床心理学的援助についての関心は高く、従来、心理学の中では周辺に位置づけられていた学問が「表舞台」に引っ張り出されている、という印象を筆者は持っている。これは、自らの学問領域を軽視しているわけでも卑下しているのでもなく、辺縁にあることそのものにこの学問領域の意義や存在価値が指摘されてきており、筆者も辺縁にあることそのものに意味を感じているためである。

本稿では、現在の臨床心理学の位置づけを理解するために、ここ20年ほどの臨床心理学という学問の流れについて検討し、さらに、心理学の領域において国家資格を作ることをめぐって生じている学問領域間のダイナミクスについて検討することを目的とする。

## 1. 臨床心理学の位置づけ

日本の臨床心理学の歴史について下山(2004)は、6つの時期に分けて示している。①第1期：輸入の時代(戦後から1960年代前半)、②第2期：萌芽の時代(1960年代)、③第3期：混乱の時代、④第4期：内面化と再構成の時代(1980年代)、⑤第5期：外圧と社会化の時代(1990年代)、⑥第6期：制度改革の時代(2000年代)、という区分である。この区分を用いると、筆者が心理学を学んだのは第4期から第5期にかけてであり、さらに、現在は第6期にあることになる。先に述べたように、筆者が臨床心理学を心理学領域の中で辺縁に位置づけられている学問として理解している背景には、筆者が受けてきた学士・大学院教育やその環境によっている部分があると考えられるため、やや私的な側面を含むことになるが、本稿の議論にとって必要な部分については記述することにする。

筆者が学部・大学院に在籍していた1980年代から1990年代の主流は「実験系」「基礎系」の心理学であり、「臨床系」の心理学は辺縁の位置にあることが「当たり前」のような状況であった。さらに、現在のような臨床心理士養成のための指定校システムもまだ存在していなかったため、大学院への進学者の大部分は研究者ポストへの志望者であり、臨床現場に出て行く人数は多数ではなかったことにもよっていると考えられる。ただ、学部では心理学全般の基礎教育があり、大学院では発展的な講義に加えて、有料の心理教育相談室での実習・研修といった臨床心理学の実践の場が、教育カリキュラムの一環として提供されていた。このような教育・研修システムのあったことが、辺縁ではあっても辺縁のものとしてのアイデンティティを形成していく基盤となったものだと今では考えている。ただこのアイデンティティ形成という点では、臨床心理学とは対極のさまざまな心理学の分野の存在していたことによる部分もあり、心理学内部の領域間でのダイナミクスが働いていたことの影響もあると考えられ、これについては後に論じることにする。

さらに、カリキュラムとして位置づけられていない実践面での教育・研修的な環境の存在は重要であったと考えている。当時は、大勢のポストドクターが在学していたため、実践面での行き詰りについてすぐに相談相手を見つけることができる環境にあった。もちろん、ケースカンファレンスは定期的には実施されていたが、より具体的な日々のセッションや実施した心理アセスメントの解釈などについての相談には、身近なオーバードクターの先輩たちが気軽に応じてくれていた。加えて、OBや外部の臨床家が指導員に任命され、希望者は毎週のスーパーヴィジョンを個別に受けることも可能な状況であり、カンファレンスには開業しているサイコロジストや現場で勤務しているOBが参加することもあった。つまり、研修や教育についてシステム化された側面とシステム化されていない側面や私的な関係による側面とが入り混じっていた時代であることがとらえることができる。この点について、吉良（1986）は、「トレーニング」と「修行」という観点から実践としての心理臨床の学習過程について述べており、具体的な到達目標に向けて段階的に進められるトレーニングと、抽象的で非特定の目標へ向けて、特定しがたい方策によりすすめられる修行とを区別して論じている。さらに、心理臨床の学習モデルを先の2分法的なモデルからとらえるならば修業的な色合いが強く、つらい過程でもあるので、トレーニング的なものに置き換えていくことが可能であり、トレーニングと修業的な学習方法のバランスが必要で、修業的であればなおのこと「仲間」「同伴者」の存在が支えとなることを指摘している。

つまり、臨床心理学の実践面では、システム化されたものとシステム化されていない教育・研修機会の二つの側面を含んでいるものであり、双方のバランスが必要であることの認識が示されていることがとらえることができる。しかしながら、いわゆる「修行」において、明文化されていなくとも、ある程度の道筋は想定されている場合もあると考えられるので、必ずしもシステム化されているかいないか、という軸だけで言い切ることはできない。また、筆者が在学しているころにはすでに大学間の合同事例検討会が合宿形式で毎年実施され、同じ学問を学び実践に携わっている他大学の大学院生との交流の場が設定されていた。現在では、このような非公的な研修の場もある一方で、公的にも日本心理臨床学会主催で「大学院生の集い」が毎年実施されている。筆者の在職している大学院の学生たちも、このような学会主催の研修会だけではなく、近隣の大学院生と合同事例検討会を相互に企画しており、公的・非公的な研修システムはより広く存在するようになった状況にあると考えられる。

## 2. アプローチの違い

心理学の領域は、かつて「実験系」または「基礎系」と、「臨床系」とに分類されていた。それが近年、「実証系」と「臨床系」とに分類され、それぞれのアプローチは「実証的アプローチ」と「了解的アプローチ」という表現で記載されている心理学のテキストもある（長谷川・東條・大島・丹野・廣中，2008）。筆者の実感としての臨床心理学のアプローチは「了解的」というよりも実践的ないし臨床実践的アプローチと表現するほうが合っている。この「了解的」というのは実証的なアプローチと対比したさいの一つの特徴としてあげられているのだと考えられる。調査法や実験法による実証性とは異なり、臨床心理学分野の研究の多くは参加観察的であり、クライアントと面接者のやりとりの中で検討していく、という点では了解的といえる部分もないではない。ものごとの特徴を顕著に示すのに、2項対立的な分類には意味があり、学ぶものにとっては理解しやすいともいえる。ただ、実際には臨床心理学領域での実証的アプローチも多々あり、すべてがいわゆる臨床実践的アプローチでもなく、発達心理学領域でも実証的なアプローチとは異なる事例研究もなされている。

それでは、なぜこのような表現が現在にいたってなされているのかの背景について次に論じる。

## 3. 専門領域間のダイナミクスと国家資格化

心理学の主流をなしているのは実験系の心理学であり、臨床系の心理学は、実験的なアプローチといかに異なるのか、自らの学問としての独自性を主張する必要性があったと考えられる。そのために事例研究法が主な手法として用いられてきたのだと考えられる。吉良（1986）も下山（2004）も、臨床心理学が西洋から輸入されて始まった学問であることやその営みや実践が、日本の文化の影響を受けて修正され発展し、独自の意味づけや位置づけを得ている点について表現は異なるものの言及している。さらに、諸外国とは異なる方向へと発展してきた点について下山（2001）は、アメリカでは「実践的科学者モデル」を取ることによって心理学と臨床心理学との折り合いがつけられて、臨床心理学の教育が実証的アプローチを基礎として行われていることを指摘している。つまり、心理学の中にもどのように位置づけるかは日本だけでの特異な問題ではなかったことが示されている。一方、国内では1988年、「臨床心理士」の認定が（財）日本臨床心理士認定協会によって開始され、その後急激に臨床心理学コースのある大学院が設立され、志望する学生も急激に増え、その結果として私立大学には心理学部や臨床心理学部としてより大きな組織としての位置づけをもつまでに展開した。

このような過程で、かつて臨床心理学がみずからのアイデンティティを主張するために臨床的アプローチをよりいっそう強調することになったこととは逆に、実験系の心理学のなかで臨床的なアプローチとは対比的なものとして実証的アプローチをとっていることが強調されるという、かつてとは逆転したダイナミクスが生じたのではないかというのが筆者の仮説である。

このような状況のなかで、心理学分野の国家資格をつくるためには、心理学の領域内の「対話」が求められているのだと筆者は感じている。特に、心理学における臨床心理学

の独自性と他の領域との共通性についての明確化が求められている。医療現場で臨床心理士に求められる教育と研修についての論考の中で、精神科医の成田（2006）は、「どのような学問でもその創成期には他の学問との違いを強調するのは避け難いことである。しかし臨床心理学が自らに自信をもつようになれば、他との協調もしやすくなるだろう。もうそういう時期に入ってもよいのではないか。」と述べている。さらに、北山（1993）は、医療現場で働く臨床心理士にとって薬物療法や医学的治療の行われる場や関係の理解（医師、心理療法家、クライアントまたは患者の織りなす『DPP 三角形』）の必要なことを指摘している。このような指摘には、臨床心理学や臨床心理士が他の学問や職業領域との間にどのような関係を取り結んでいくのか、という将来的な方向性や学問ないし職業的な理念が問われているのだと考えられる。

ここまで述べてきた臨床心理学の動向のなかから、「実証 VS 了解」という対概念が提示されていると筆者は考えている。つまり、かつて臨床心理学のアイデンティティとして個を理解する事例研究に中心をおいてきた時期があったように、心理学が実証的なアプローチに中心をおいていることを再確認し、相互の領域が対話しながら、互いの位置づけや関連性を検討していることのひとつのあらわれだと考えることもできるであろう。このように、学問のありかたには、その時代の他の領域の学問との間に生じるダイナミクスやバランスの中から生み出されている側面があり、一連の流れや動きとしてとらえる視点が必要であると考えられる。

[付記]：本論文の執筆のきっかけになったのは、2006年度より実施している福田廣教授との共通教育「心理学」授業の共同研究です。FDの一貫として、それぞれの学問的アプローチを活かして1コマの講義を分担することで、学生の理解に貢献できるかについて実践的に検討しています。さらに、2008年度より小杉考司講師と沖林洋平講師も加わり、より実証的に教授過程について検討をすすめています。これらの過程で、自らの学問的位置づけやアプローチの特徴について改めて考えたことをまとめたものです。ここに記してお礼申し上げます。

## 文献

- 長谷川寿一・東條正城・大島尚・丹野義彦・廣中直行（2008）：改訂版 はじめて出会う心理学，有斐閣アルマ。
- 北山修（1993）：臨床心理学者の医学的理解について，九州大学教育学部紀要（教育心理学部門），第38巻，第1号，45-52。
- 吉良安之（1986）：心理臨床の学習の仕方，前田重治（編）（1986）：カウンセリング入門—カウンセラーへの道，有斐閣選書，pp. 264-276。
- 成田善弘（2006）：医療現場で働く臨床心理士に求められる教育と研修，臨床心理学，第6巻，第1号，64-68。
- 齋藤高雅（編）（2006）：臨床心理学研究法特論，財団法人放送大学教育振興会。
- 下山晴彦（2000）：研究の方法論，下山晴彦（編）：シリーズ・心理学の技法 臨床心理学研究の技法，福村出版，pp. 3-26。
- 下山晴彦（2001）：臨床心理学研究の多様性と可能性，下山晴彦・丹野義彦（編）（2001）

- ：講座 臨床心理学 2 臨床心理学研究，東京大学出版会，pp. 3—24.
- 下山晴彦（2004）：臨床心理学の発展に向けて，下山晴彦（編）：心理学の新しいかたち 第9巻，臨床心理学の新しいかたち，誠信書房，pp. 3—21.